

2019年12月15日

(報告)「現代資本主義をどう捉えるか」

高田太久吉 (金融・労働研究ネットワーク)

1. 現代資本主義を理論的・歴史的・世界的に (トータルに) 捉える必要性

多国籍企業が世界経済の動向を主導するグローバル化した資本主義

資本主義の経済的・政治的・国際的諸矛盾がグローバル且つ新しい様相で深刻化
格差問題、環境・エネルギー問題、失業・貧困問題、「成長の限界」、「戦後政治秩序の
流動化」、「金融危機」他の諸問題がグローバルかつ相互に深く相関して進行

21世紀資本主義の先行きは極度に不透明、多くの人々が資本主義の存続可能性に疑問を持ちつつ、展望が開けない状況が生まれている (資本主義の全般的危機??)

「政治経済学」を含む「社会科学」に課せられた課題

「現代資本主義は、全体として、どのような歴史的立ち位置にあるのか」、について人類史的観点から理論的・歴史的に考察する必要性

政治経済学は、現代資本主義の極度に複雑で矛盾した状況から、どのような将来展望のある歴史認識、世界観、価値観 (イデオロギー) を提示することができるのか

こうした課題に向き合うためには、政治経済学の理論、歴史、現状分析の最新の成果を結び付け、新しい課題に総合的に適用し、さらに発展させる必要

(具体例) リーマンショックを契機とする世界的金融危機と世界不況の分析を通じて、
政治経済学の理論、歴史、現状認識を刷新する作業

以上の課題は、現代資本主義の諸矛盾を具体的/実証的に分析する必要性を否定するものではなく、それらの分析を大きな歴史認識と関連付ける必要性を提起している

2. 「現代資本主義」の時期区分について——戦後資本主義の過渡期としての 1970年代

「ブレトンウッズ (IMF) 体制」の崩壊と「石油ショック」を契機とする戦後高度成長の終焉、スタグフレーションとして現れた「資本の過剰蓄積」

投資拡大⇒雇用拡大、生産性上昇⇒賃金上昇を軸とする資本蓄積構造の崩壊

投資抑制、賃金圧縮、雇用削減、「合理化」による低成長下の利潤回復

⇒ 労働組合攻撃の強まり、企業・経営者権力の強化=新自由主義の強まり

⇒ 同様に「資本の過剰蓄積」を背景に「経済の金融化」に向かう傾向

米国のベトナム戦争の敗北、米ソ「冷戦」の深刻化、国際的マクロ不均衡の拡大、ドル防衛策の発動と国際通貨体制の動揺 ⇒ 米国覇権体制の再編成

この再編成は、米多国籍企業主導のグローバル化と相俟って進行

以上から、多くの研究者が現代資本主義への移行期として 1970年代を念頭に置く

以後 40~50年間を現代資本主義と呼ぶことにする

3. 現代資本主義を特徴づける「経済の金融化」について

現代資本主義は生産力の発展と労資矛盾の深まりから様々な歴史的に新しい特徴・問題をともなっている（地球環境問題、格差・失業・貧困、グローバル化、ICT化他）

「経済の金融化」は、それらの顕著な特徴・現象の一つ

「経済の金融化」に着目する「金融化アプローチ」は、現代資本主義分析の唯一正しいアプローチと考えるべきではない（方法論上の open question）

「金融化」を表す諸現象

低成長・高失業と結びついた、金融産業と金融市場の急膨張

頻発する金融危機と慢性的金融緩和を背景とする、金融資産と金融的利得の急増

貨幣資本の過剰蓄積が促進する、金融革新と金融グローバル化の急激な進展

景気循環の様相変化：過剰生産恐慌（商業恐慌）から頻発する金融危機へ

金融仲介システムの構造変化（金融の証券化）

「間接金融」の衰退、証券（架空資本）ベースの金融仲介が支配的に

銀行（預金・貸出市場）から投資銀行/機関投資家（資本市場）への主導権の移動

⇒ 銀行の投資銀行化（グラス＝ステイーガル法撤廃、金融持ち株会社）

⇒ 非伝統的金融産業（投機組織、資産管理業、shadow banking）の拡散

⇒ 金融革新と新しい架空資本市場形成（金融派生商品、証券化商品、暗号通貨）架空資本市場における価値増殖回路の拡大、「資本の架空化」の進行

企業経営の金融化（財務に傾斜した企業経営、企業の機関投資家化）

内部留保積み上げ、金融関連子会社設立、自社株買い、M&A活発化、持ち株会社化、金融テクノクラートが主導する経営、「株主価値重視の企業統治」、金融的利得に依存した利潤追求、株価に連動する経営者報酬

家計の金融化

富裕層・経営者による金融資産と金融利得の集中（⇒所得と富の格差拡大）

労働者・市民の貯蓄（投資信託・保険・年金他）の証券市場への動員

中央銀行の変質（通貨の番人から証券市場の保護者へ）

「最後の貸し手」から「最後の買い手」へ

国債「管理」に依存し、国債市場に取り込まれた財政政策

国債市場とその他証券市場・金融市場との連動 ⇒ 財政・金融の相互依存

以上の意味で「経済の金融化」とは、

企業、家計、財政をふくめ、資本主義経済全体の運行が証券（架空資本）市場の動向に依存し、規定される（シンクロする）度合いが強まる傾向を意味している

⇒ 資本主義経済の矛盾が「金融危機・バブル崩壊」として発現する傾向

世界経済の循環様式（過剰資本の累積・処理形態）が変容

4. 現代資本主義に顕著な「経済の金融化」を理論的にどう理解するか

経済の金融化は「資本の架空性」の深まりを意味している

資本の一般的運動形態は貨幣資本の前貸しと回収を介する価値増殖 ($G \cdots G'$)

貨幣は商品の交換価値を物象化した「一般的等価物」で、商品（有用物）ではない

交換価値は、労働生産物の商品形態から発生する経済的属性（社会関係）であり、商品経済に特有の「価値」であり、人類史的な意味では「実体的な価値」ではない。資本に包摂された賃労働が生み出す「価値」は、資本の運動と社会的分業との関連を基礎にして初めて説明できる。「金融化」のもとで社会的分業から遊離し、金融市場を介する貨幣資本の増殖運動として現れる資本の運動は、本来的に「架空の価値増殖」運動。これを可能にするのは、資本の商品化（架空資本化）によって、資本が商品として交換価値を具有し、膨大な市場を形成すること。

《価値について理論的に考えるための例題》

巨大軍需産業に従事して膨大な殺人兵器を生産する労働者は「価値」を生産するの
か?? するとすれば、それはいかなる「価値」なのか、逆に、しないとすれば、
労働価値説は軍需産業には妥当しないのか??

「経済の金融化」＝「架空資本市場依存型資本主義に向かう傾向」は、資本主義が本来の健全な成長経路・蓄積様式から[新自由主義の影響で]一時的に乖離し、腐朽性を強めた結果と考えるべきではない。貨幣形態での価値増殖 ($G \cdots G'$) を目指す資本の運動は本来「非」実体的/「非」有用的であり、架空的/「非」文明的である。いかなる実体（現物性・有用性）も具有しない暗号通貨（サイバー資産）が投資資産として投資家に保有されるのは、資本が追及する「価値」がもともと架空の貨幣的「価値」に他ならないからである。この意味で、「経済の金融化」は、資本の本性（概念）から発現する本来的傾向であり、資本主義の歴史的発展の必然的帰結（純粋な資本主義、資本主義の完成形）である。

5. 現代資本主義の混迷と行き詰まりを表す諸現象の多くが「経済の金融化」と関係している。その理由は、「経済の金融化」によって、資本の運動と社会的分業（人類社会と文明の根源としての社会的な人間労働、その相互依存・補完関係）の関連が希薄化する（社会的分業から遊離した社会関係に価値増殖の回路を形成する）ためである。

⇔ 経済成長率/資本蓄積率の低下、マイナス金利、生産性と賃金の相関関係の切断、投資と雇用の相互補完関係の切断、社会的統合性と両立しない格差増幅と失業・貧困の増大、経営者・富裕層による膨大な架空資本の集中（現代資本主義に特有の「バベルの塔」）、社会貢献から離反した株価重視の経営、企業の機関投資家化、株価連動型報酬制度、投機の蔓延と金融・通貨危機の頻発、中央銀行の「最後の買い手」化、タックスヘイブンの拡散、ブラック企業・ハゲタカファンドの増殖、・・・このリストはさらに大幅に延長できる。

以上の諸現象は、人間労働の社会的意義（文明社会を支える社会的分業の重要性）を希薄化させ、単なる資本の価値増殖（カネ儲け）の一手段に矮小化する。「労働力の商品化」が、社会的分業関係（価値法則）から乖離して独走。

同時に、「経済の金融化」によって、「資本と文明の衝突」が露わになる。

⇒資本主義の存続が人類社会の発展（文明の進歩）の障害となる傾向が顕在化する

拝金主義とあからさまな金権政治、政治[家]の退廃と公権力の私物化、司法制度・官僚制度の腐敗、議会制民主主義の形骸化、社会的ニヒリズム・反知性主義の広がり、社会的分断と差別・隔離の深刻化、有権者の政治不信とポピュリズムの広がり、新自由主義による福祉国家の解体（基本的人権、民主主義の否定）、教育・医療・ライフライン・社会インフラの営利事業化、軍需産業の肥大化と国際紛争の激化、地球環境を考慮しない資源・エネルギーの乱獲・浪費、コンピュータサイエンス・ICT・バイオテクノロジーの非文明的営利技術化、巨大多国籍企業によるグローバルな労働搾取と課税忌避、・・・・このリストもさらに延長できる。

《関連する設問》

報告者のいわゆる「資本と文明の衝突」現象は、しばしば人間社会と地球環境をおびやかす「(高度に発展した)文明の脅威」、あるいは「自然/社会と文明の衝突」として論じられている。果たして、文明の過度の進歩と人類社会の発展とは「衝突」し、両立し得ないものなのかどうか。高度文明は、それ自体、結果的に地球環境と人間社会に対する甚大な「脅威」となるのか?? 文明を人類史的観点から再定義し、現代資本主義の矛盾を文明史的観点から考察する必要があるのではないか（田中正造の「真の文明」論）。

6. 「資本主義の終焉」をめぐっては、下記の論点が重要である。これらについて詳しくは、参考文献（月刊『経済』2019年11月）末尾の論述を参照してほしい。

「資本主義の終焉」とは、どのような事態を意味しているのか?

「資本主義の終焉」は、政治経済学の枠組みで十分に説明できるのか?

⇔ 資本主義は経済的な「行き詰まり」によって終焉するのか??

旧ソ連や東ドイツの社会体制は、もっぱら経済的矛盾から崩壊したのか??

「資本主義の終焉」をめぐって政治経済学に課せられる重要な理論的課題は何か

- 資本主義に変わる新しい社会体制の基本的な政治的・経済的構成原理についての理論的研究
- 今後も急速な発展が予想されるコンピュータサイエンス・ICT 他が及ぼす社会的・文明論的影響
- 人類が資本主義を乗り越えて新しい社会体制を目指す歴史的運動の過程で、福祉国家はどのような歴史的役割を果たすのか

政治経済学に課せられる課題が以上にとどまらないことは言うまでもない